

鴻 koh

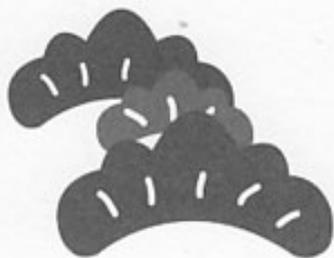
月刊俳句誌

令和3年1月1日発行  
(毎月1回1日発行)  
第16巻第1号 通巻175号

1

月号

2021



纜に百の貝殻冬がくる

霜月の鵜のいろとなる濔標

鯔の子を数へる術を持たざりき

千草八千草一人つきりの島遍路

葦を刈る音が里山の音となる

雄鶏の声して峽の小春どき

絶巔は雪山麓は深紅葉

あかときの茶山に焚ける霜くすべ

葦火跡踏むで一人となる日暮

山頭火のごと托鉢のゆく枯野

一服の茶を所望して日向ぼこ

火を焚かな山へと熊の戻るところ

注連を縋ふ男が五人山に雪

# 火を焚かな

主宰作品

増成栗人

# 詩 作品抄

関八州柿は柿色醸しけり 畑田久美子

数珠玉や丸太を渡すだけの橋 北村 操

柿すだれ紀の国の峡暮れ色に 林 未生

仏らの絨毯となる曼珠沙華 山崎正子

夢一つありあかあかと烏瓜 藤原明美

秋蝶のふはりふはりと素十の忌 相川 健

万葉の里の日暮の実むらさき 遠藤 泉

漫画館へとんぼうがくる小鳥くる 西條弘子

ぼうぼうと秋刀魚を焼いて道半ば 森 祐司

絵硝子のランプシェードを拭ひ秋 美濃律子

十六夜の玩具の電車交差して 神野未友紀

返り花とは思へざる花の数 生井ちよみ

小野小町の腰掛けし石虫すだく 小林和子

あたらしきペーパーナイフ冬隣 佐藤あさ子

断捨離の始めはピアノ鳴高音 伊藤真代

手秤でふくべの重さ確かむる 横山光榮

振り向いてみても一人の野路の秋 山内宏子

秋暑し獅子座の娘から贈り物 佐藤慧美子

秋風や指で転がすボールペン 青木まゆ美

調律の音が幾度も秋徴雨 中川幸恵

増成栗人 選

## 「湯島・さて御徒町秋葉原」

鈴木 崇

JR御徒町駅から春日通りを歩いて湯島天満宮に向かう。

湯島神社、湯島天神の名でも親しまれ、学問の神様、菅原道真を祀る社。境内の梅がよく知られており、「湯島の白梅」の見ごろには境内がいっそう華やぐ。

境内へ続く二つの石段は、「男坂・女坂」の愛称で呼ばれる。女坂の名は、途中に足休みがあることに由来する。

## 梅雨あけやさて女坂男坂

久保田万太郎

久保田万太郎は昭和三十年、六十七歳の時に男坂と女坂のあいだにある二階家に移り住んだ。さて今日はゆっくり緩やかな女坂を歩こうか、それとも急な男坂から上がるか。気ままな万太郎の散歩コースだったのだろう。

境内には泉鏡花の筆塚がある。鏡花の代表作『婦系図』を原作とした新派の芝居では湯島境内が印象的に描かれる。鏡花にはズバリ『湯島詣』という作品もある。

他には都々逸の碑や講談高座発祥の地碑など、私好みの芸能・芸事にまつわる記念碑もあり、うれしくなる。

また、個人的には湯島天満宮オリジナルの御朱印帳のデザインが素敵なのでおすすめです。

湯島から神田明神まで歩く。高台から低地へ下って行く行程は、途中に実盛坂や妻恋坂など趣ある名前の坂があつて、格好の町歩きコースだ。

神田明神には大黒さまに恵比寿さま、平将門が祀られている。

境内には神馬の馬舎があり、ポニーの「あかりちゃん」の姿に気持ちが和む。このあかりちゃん、以前、脱走して道路を疾走するという微笑ましい珍事があつたそうだ。

境内脇の公園には、「神田の家」と呼ばれる商家が移築保存されている。材木問屋の店舗兼住宅であつたという。材木商という職業柄、良材銘木がふんだんに使用されており、風格がある。境内から一步離れ、静

かな穴場スポットだ。

神田明神からは湯島聖堂も近いのだが、今回は秋葉原へ向かうことにする。

秋葉原は世界有数の電気街で知られる。かつての闇市や青果市場、オーディオ・家電ブームを経て、近年ではホビーやアニメなど「趣都」の街として、時代を反映させながら独自の変化を遂げてきた。

JR秋葉原駅のガード下にある秋葉原ラジオセンターは、電子部品を扱う小売店が集まる昔ながらの場所の一つ。入口近くに理工系書籍を主に扱う「万世書房」がある。霜島和子さん。

書店の創立は昭和二十六年。父親の店を継いでから五十年以上、街の変遷をこの店頭から見てきた。

「日本一小さな書店」に秋葉原の奥行きを感じる。今日も和子さんは本棚の向こうから街の流れを見つめている。



万世書房・霜島和子さん

「箸」とは食物などをはさむ一对の細い棒で、食事や調理の際、おもに片手に持って使うものである。その材料には竹、柳、杉などの植物のほか、銅、鉄などの金属、象牙その他の動物の骨、角などが使われている。

「箸」は日常の食事に用いられるほか、平安時代以降、晴の儀式や行事の際の食事に用いられるなど、我が国の食文化に欠かすことのできない道具である。

山の風一箸ごとに木の芽和 鴻司

箸

特集

## もち古りし夫婦の箸や冷奴

久保田万太郎  
森 睡花

買い揃えた夫婦箸。もう先が丸味を帯びてきた。連れ添って何年が過ぎたのか、この箸が知っている。  
夕餉には冷奴が添えられる。決して贅沢ではないこの食材が、食卓に上ることは多い。

いろいろあつて積み重ねてきた歲月。今では何事も無かつたように穏やかな夫婦の日々が流れる。気付かぬ程静かな幸せが流れて行く。

冷奴の持つありふれた平凡さがこの句の生命。平明かつ味わい深い一句は、冷奴でしか成立しなかつたと思ふ。

万太郎には有名な湯豆腐の句もあり、豆腐が余程好きなの

# 箸の一句

「箸」を詠んだ自分の俳句、または「箸」が詠まれた愛語の句と、その句についてのエピソードや、俳句のなかでの「箸」について語っていただきました。

## 春の川媪来りて箸洗ふ

柿本多映  
足立枝里

午前中の早い時間、川に老女が屈みこんでお箸を洗っている。朝餉の後だろうか、春の朝でまだ少し寒い、日を浴びたくて散歩も兼ねて川まで来たのかもしれない。

この句は「女」でなく「母」でもなく「媪」であることが興味深い。もしかすると「桃太郎」の物語を詠んでいるのではないだろうか。おばあさんが川で洗濯をしているところに桃が流れてきて、その桃から桃太郎が生まれる。物語ではすぐに大きくなって鬼退治に行くが、この句は彼が大きくなるまでの生活を詠んだのかもしれない。桃太郎の話はファンタジーだが、その家族にも実生活があるかのように詠んでいると思うと面白い。

作者の柿本多映氏は、一九二八年滋賀県生まれ。今年四月に第五十四回蛇笏賞を受賞された。当初は短歌に携わっていたが結婚を機に作歌から離れる。五十歳前に作句を始める。現在九十歳を過ぎてはいるが、年齢を感じさせない自在な句が多い。

## 死ぬときは箸置くやうに草の花

小川軽舟  
山岸明子

人はふと死ぬ時のことを思うことがあるのか、それを詠う俳句や短歌が色々ある。この句では、死という非日常が「箸」といついづも使っている思いがけないものと組み合わされ、そし

か…。そう言えば万太郎先生にステーキは何だか似合わない。やっぱりお豆腐だ。

## 夕空見てから夜食の箸とる

尾崎放哉  
原 達郎

よく知られているように、放哉の人生は世俗を捨てきつた人生であった。その放哉が長い葛藤と軋轢の果てに平安を得たのは、小豆島における生涯最後の八か月の生活であったという。『尾崎放哉全句集』（春秋社一九九三年）をみると、中学時代からの全作品収録数一三二四句のうち、このわずか八か月間の句は三八一句を数える。そして現在放哉の代表句として取り上げられる句はほとんどすべてこの期間の作品であり、掲句もその一つである。小庵の堂守の収入は、地元の理解者からの差し入れや井泉水など「層雲」関係の支援者からのたまの送金にすぎない。その死はほとんど餓死であったと伝えられているが、その日は差し入れが何か食べるものがあつたのである。この「夜食」は時間からすれば夕食だが、ここは季語というよりは韻律をたもつ必要から選んだと思われる。孤独と諦念、そしてそれを包むほのかな諧謔がゆっくりと伝わってくる。自由律とは自ら選び取つた特異な境涯と、詩人としての生得の抒情性が結合するところに成立するものだと思う。

て身近で咲いている慎ましく寂しげな「草の花」とともに詠われている。いつも通り食事をして「ごちそうさま」と箸を置くと静かに死が訪れる。「箸を置く」というあまり意識することのない日常的な動作が印象的である。外では名もない草々の花が微かに揺れている。日常の延長の、静かで穏やかな景の中の死への願ひ。

死の時を詠う有名な句として、三橋鷹女の「白露や死んでゆく日も帯締めて」がある。死ぬ時もきりりと白帯を締めてという美意識と緊張感に溢れた素晴らしい句だが、それとは全く異なつた「箸」を用いた何気ない揚句が心に残る。

## 箸紙に「ばば」の太文字雑煮待つ 渡辺桂子

平野鉄哉

他家のことは知りませんが、わが家では孫が生れてどのくらい過ぎていたか覚えていませんが、私のことを「じい」と呼ぶ様になつていました。妻もいつの間にか孫たちの来ていない時でも私を「じいちゃん」と呼ぶようになっていました。

この句の作者の家では、毎年為来りを守って正月元日の膳には太箸を入れる袋（箸紙）に家族全員の名前を書き入れている様で、大きくなつた孫たちの遊び心でたまたま箸紙に書かれた「ばば」を受け入れ、作者自身がそれを楽しんでる様子わかる、明るく気持のよい句だと思いました。

句集『吾亦紅』より、昭和五十六年作。

足立枝里さん、お洒落な第一句集『春の雲』のご上梓に拍手を惜しみません。

長く広範な句歴の中で、「私の特に好きな句」として厳選された136句ですね。ご本人は「まさかこの小さな句集を…」と控えめですが、いち早く句集鑑賞に取り上げた「鴻」の懐の深さに敬意を表します。何分才無き輩、鑑賞の至らぬ点はご海容のほどお願いいたします。

### 1 作家のパーソナリティーが見える

ずる休みしてしまふ日の春の雲  
捨案山子すこし夜遊びしてきたり  
約束を出来ぬ男と焚火かな

斬新な現代俳句の調べですね。あつげらかんとした告白の「ずる休み」、少しオイタな「夜遊び」、ふん、ふん、どこで何を来たの？そして第三句、これぞ枝里俳句の真骨頂でありましょう。姐様はぐざりと刺しつつ、でもまあ憎めない男ね、と若干不本意ながらの寛容と。いいなあー

つくし野へしづかに傘をひらきけり  
白玉や渡せぬままである手紙

好きなのかしらん。「青葉潮割りて」の非凡な視点、新鮮な表現が印象に残ります。

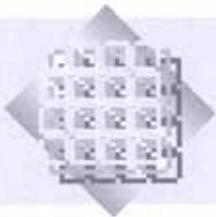
### 3 確かな写生と豊かなロマンも

海の水かけ海女たちの焚火果つ  
火を焚きて雪の港の船出かな  
夏霧や静かにカヌーすれちがふ

余計な修飾のない情景描写ですね。だからこそ、居合わせる人々の心情までがドラマのように伝わって来ます。第三句の静まり返った美しさを何と言うべきでしょうか。先人の曰く「俳句は平明こそ命」そのものですね。

乙姫の衣は海月かもしれぬ  
伝令のやうにきちきち鳴き交はし  
鳥たちの伝言として木の実降る

海月を目前にして「乙姫の衣」とは絶妙な発想、ロマンに満ちていますね。きちきちが「伝令のやうに」、鳥たちが「伝言として」のこの共通する感覚の豊かさに脱帽です。



## ● 小林良作



息白くして告白をできずぬる

一転、紛れもない淑女としての句を拝見しました。「しづかに傘を」は深水の一幅の麗人画を見るようです。「渡せぬまままで」、「告白をできず」は秘めたる女心の核心と言つ外ありません。

### 2 枝里さんの心の内にあるものは

風船を渡す迷子にならぬやう  
おはじきのきらきら春の雪となる  
初夏や少女の腕に傷ひとつ

それは、幼児への、小さな物への優しい眼差しであります。少女の過去をおもんばかる慈しみであります。弱者やマイノリティに視線を置くお人柄の表れでありましょう。

ソーダ水海見るための切符手に  
背泳ぎの静かな海となりけり  
青葉潮割りてくじらの背の見ゆる

旅行や吟行をこよなく楽しまれますね。前二句からすると、もしかしてへひとり・独りんが

### 4 そして番外鑑賞アラカルトを

他に家庭婦人としてのほのぼのとした佳句も多く拝見しましたが、紙幅が足りません。  
香りや匂いに敏感でありましようか「匂ひ・匂ふ」の句、また「男・をとこ・夫」の句も少なくありません。ここは番外アラカルトとして次の一句で結びとしましょう。

男湯の声響きあふ山開き

夏の山湯における屈託のない明るい笑い声、隣の女湯へも「響きあふ」のです。もちろんお互い全裸でありましよう！何とも和やかな、限りなく平和で幸せなひと時ではありませんか。

過日、楸野門の著名な俳人から書状をいただく機会がありました。氏曰く「己の個性が如何に表出しているかを問うのが文学の基本。俳句で言うなら『他人と似ない自分、句の中に己が生きるように』が第一義、それが大切です。上手く詠むのは次の問題・・・」と。

「春の雲」はまさに枝里さんの個性が見える句集そのものです。若々しくフレッシュで爽やかな句集に出会いました——拍手再献。

# 栗庵閑話 41



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>



# 羽音集

増成栗人 選



もみぢ葉を使ひ足し算教へをり  
 さはやかに髪なびかせてペダル漕ぐ  
 布引の滝の流れの落葉かな  
 万葉の里の日暮の実むらさき  
 三輪山を遠くにしたり赤まんま  
 夢一つありあかあかと烏瓜  
 秋の暮辻の地蔵に手を合はす  
 野菜干す筈へ蜻蛉の来ては去る  
 応答の語尾しやつきりと月の宴  
 芝を這ふ嬰よ秋の日のうららかに  
 空席のひとつそのまま秋の暮  
 駅前タクシー乗場いつしか霧  
 捨案山子雲の行方を追うてゐる  
 敬老日先づ靴紐を確と締め  
 朝顔や窓辺に寄りて通す糸  
 金平糖こりんかりんと夜学生  
 名月やドールハウスの舞踏会  
 菊脛御所人形のまろき顔  
 秋澄めり首里城跡のボランテニア  
 模写するは北斎漫画鱈雲

大阪 遠藤 泉

船稿 藤原明美

松戸 吉清和代

習志野 野村昌代